

年九月三日

慧任宮內少書記官 參事院議官補從六位 河上 房申

獨立防衛ノ法

日本支那ノ關係ハ輔東竹齒ニ非ズ支那帝國ノ存亡ハ素ヨリ
 以テ日本國ナシテ温ナラレムルニ足ラズ又以テ塞ナラシム
 ルニ足ラズ今回ノ事變遂ニ支那ノ敗北トナルトモ爲メヨ日
 本ニ輔車脣齒ノ援ナ絶テ國ノ安危ヲ刦スノ憂アル可フザル
 ハ勿論ノ「ナレ」唯、支那ノ敗北倍々以テ西洋各國ノ侮慢
 ナ増シ東洋亦容易ニ與ヨシ易シトノ勇氣ナ以テ他日東征シ
 望ナ起サバソノ患害實ニ何モノヨリモ恐ロシカラントノコ
 ハ昨日ノ紙上ニ大略論シテ復タ遺ス所無カルベシタヽ此上
 ハ我日本國ハ如何ニ自カラ處スレバ可ナルベキカナ定メ其
 定マル所ニ應シテコレガ道ナ開クハ我國永日ノ大事ニシテ
 亦目下急要ノ問題ナラン蓋シ今日ニ於テ東洋列國ト稱スル
 者ハ日本支那ニ二國ナ除ケハ他ハ殆ンド獨立ノ名義ヲ附ス
 ルニ足ラズ然ルニ佛清今回ノ交戦ニ支那彌々敗北ヲアレバ

ノ一獨立國ナ見ザルニ至ルハ必然ノ勢ナラン此際ニ當テ
國ガ能ク之ニ處シテ國威ナ全カラシメントスルニハ西洋列
國サシテ日本ハ與シ易キノ國ニ非ズ一種東洋以外ノ強國ナ
リトノ實際ナ知ラシムベキニ第一大切ノ儀ニシテ之ヲ行フ
ニハ間断ナク進メ西洋ノ事物ヲ採取シ國ナ學テ文明ノ方
向ヲ取リ又ハ内外ノ實際ナ親シムベシナド文時平日ノ談ト
シテハ勿論肝要ノ事ナレニ今ヤ東洋ノ戰亂將ニ激烈チ極
シトスルノ折柄ナレバ今又緩徐トシテ之ヲ言フニ違アラズ
急ニ臨ンデハ唯急ニ處スベシ急ニ處スルノ道ハ一ニ我日本
國ニ自衛ノ策ナ立ツルニ在ルノミナラン

ソノ順序アルベキガ故ニ先ツ第一ニ日本國ノ地位如何ナ
、尋ヲ自カラ備フルノ道ヲ求ムルハ目下ノ急務ト云フベ
先ツ支那トノ關係ハ既ニ前號ニモ記シタル如ク我ヨリ一言
ノ援ヲ求メズ又求ルニ足ラサルモノト觀念シ是迄ハ其海陸
軍振作ノ様ナドニテ一時或ハ以テ日本人ノ憂慮ナ慈キタ
姿モアリシガ今日ニテハ既ニ忍ル、ニ足ラズ去逆又恃ム
キニモ非ザレバ之ガ爲ニ喜憂スルヲ止メ今日以後ハ只
ヲ西洋ニ對峙シテ國ヲ立ルノ謀コソ緊要ナラン而シテ其國
ノ武備陸海二様ノ中海軍ニハ鐵砲船ノ固メ素ヨリ以ニ
幾重ナラアル可ラズト雖ニ今ノ日本ノ地位コソテハ萬一二
洋ト事アルトモ遠ク數十隻ノ軍艦ヲ繰出シテ西洋ノ海岸
砲臺ニコレガ攻擊ナ試ムルナンドノコハ先ツアラレ間敷
水第ニシテ一朝開戰ノ際ニハ彼ノ軍艦ヲ我沿岸ニ引受ケ
シ難儀ナシスベキノ覺悟無カル可ラズ故ニ我國ノ兵備ハ
アツ他ヲ攻ムルヨリハ堅セテ自カラ防ケノ道ヲ取リ自力

防クニ餘力アルニ至ラバ其時ニハ數萬里ノ遠洋ニマア懸軍
長驅スベキハ誠ニ國ノ光リナリト雖ニ今日ノ急務ハ沿海ノ
防禦ヲ堅固コスルヲ主トセント我輩ノ希望スル所ナリ我輩
ノ限前ニハ既ニ支那ノ幻影テ見ズ惟西洋各國ニ對時シテ與

シ易カラザルチ人ニモ知ラセ自カラモ恃マソニハ軍艦ト
水雷火船トハ攻防ノ質地ニ臨ンテ孰レカ有力ナルヤシハ深
クモ我輩ノ知レル所ニハ非ズト雖ニ近時攻防戦争ノ器具ノ
日ニ改良變革スル趣ナ察ハルニ海強國ノ武備ニハ水雷火船
ノ用實ニ缺ク可ラザルモノナリト云フベシ我輩ハ護國ニ軍
艦ノ必要ナルチ知ルノミナラズ其水雷火船ト與ニ岡立シテ
偏ニ陷ラザラントチ冀フト雖ニ爰ニ日本國ノ防禦チ嚴重ニ
スルトノ主點ヨリ見ル所ハ特ニ水雷火船ノ備ヘチ張ルハ捕
徑ニシテ大効アル者ト云フナ得ベシ蓋シ水雷火短續ノ利益
トスル所ハ種々ナラソナレヒ第一ニハ製作ノ費用廉ニシテ
堅固ナル一艘ノ軍艦チ作ヒ代價ナラバ以テ六十艘ノ水雷火
船チ作ルニ餘リアルノミナラズ一船ノ軍艦チ更團ニハ四
艘乃至六七艘ノ水雷火船アリハ充分ニシテ且ツ甲鉄艦
レバ其裁製ニ概予三四四年乃至六七年チ費スベキニ水雷火船ト

六箇月ニテ既ニ其功ヲ竣シ洋上ノ運轉ハ太ダ自在ニシテ暴風怒濤モ恐ル、ニ足ラズ敵艦ノ砲撃モ憂フルチ要セズタル速力ノ如キハ近時改良ノ者ナレバ充分ニ甲鐵艦ナモ凌クベシト云ヘリ尤モ詳細ナル利害得失ニ至リテハ之ニ從事就中沿岸ノ防禦ニ用ヰテ最モ倔強ナルノ事實ハ世人モ既ニ知悉スル所ナレバ日本國ノ防禦ニハ專ラ此水雷火船ノ用ニ盡シ内海港口ハ申スニ及ハズ北海ノ灣、西漢ノ淺到ル處ニ之ヲ備ヘテ寄ラバ打タンノ覺悟ヲ定メナハ一朝事アルノ際ニモ果シテ與シ易カラザルノ力ヲ示ス亦容易ナランノミ堅固ナル一艦ノ軍艦ヲ製作スルコソノ費ナ二百萬圓トナシ此艦十艘ヲ作ルノ費用二千萬圓ナ以テ更ニ水雷火船ヲ作ラバ以テ六百艘ヲ得ルニ足リ且ツ五艘ノ水雷火船ヲ以テ一隻ノ軍艦ニ抗シ得ルモノトセバ此六百艘ハ以テ百餘艘ノ來攻堅固ナル一艦ノ軍艦ヲ製作スルコソノ費ナ二百萬圓トナシ此艦十艘ヲ作ルノ費用二千萬圓ナ以テ更ニ水雷火船ヲ作ラバ以テ六百艘ヲ得ルニ足リ且ツ五艘ノ水雷火船ヲ以テ一隻ノ軍艦ニ抗シ得ルモノトセバ此六百艘ハ以テ百餘艘ノ來攻「シヤルム」氏ノ測定ナリト云フ）實際ノ事ハ或ハヤノ半且ツ知ルベキナリ日本帝國ノ海岸三千七百里、環ラスニ一面ノ海洋ナリト見テモ沿岸ノ防禦ニ水雷火船ノ有用ナルト尙且ツノ四面圍ムニ水雷火船ナ以テシ別ニ鉄艦ナシテ東西應援ノ緩急ニ備ヘシメナバ萬一ノ事變アリトモ亦何ゾ憂苦ヌ所アランヤ既ニ前ニモ述タル如ク佛清ノ事ソノ運命ノ歸スル所ハ支那ノ敗北ニシテ支那ノ敗北トハ乃チ東洋興シ易キノ端ヲ開ク者ナレバ我國ニアモ其隣ニ盤ミテ大ニ警説ナ加ヘ何時如何様ナル事變ノ外國ヨリ壓逼レ來ルトモ我ニハ猶シテ備フル所アリテ泰然坐シテ之ヲ待タバ倉皇狼狽シテ支那

ノ爲ナヌストナク巍然トテ國ヲ保ツト易シ即ち西洋ノ鉄
艦恐ル、ニ足フズ我雷火船以テ之ヲ破碎スルニ足ルベシ
トノ信ヲ得ルモノナレバ信ヲ得テ我民心モ亦始メテ安シ、
安心ヨク勇氣ナ生シ乃ハ後圖ニ着手ス可キナリ

○佛國艦隊 佛國水師提督アーネーの引率する艦隊十二艘
は八月廿三日福州羅星塔碇泊所にて清國軍艦揚武號以下十
一艘と交戦して大勝利を得る後同所馬尾の造船所を砲撃
して徹底に碎き追て閩江を下り海より出る途中の岸上より在る
閩安及び金皮の砲臺をも砲撃破壊し去る卅日朝福州港閩
江を去りて十二艘一同何れの方へか向け進航したるまゝ更
に音沙汰なく南下北上其續首の向ふ所を知る由なきりしが
一昨三日夜半上海より東京の或る方へ左の電報到達したり

艦隊は十四艦と爲りて再びまた福州河口に歸り來りるゝのと思はる是れにてハ唯目下佛國艦隊の所在が分りたるものにて去月三十日以降何れの地も在りく何事を爲して在りしクの一時は更に分らむ一說によクルベー提督は石炭積入れのたゞ三十九日に福州を去りて台清の雞籠港ふ赴き右の用事を畢りたる上ふく再び福州へ歸り來りるもれならん左ればにや兼て雞籠港よ^リ「ガリソンコール」「ルーナン」の二艦碇泊し居るとの噂ありしが初め十二艘よ^リ福州を去り歸途にハ右二艦を同伴し來りて都合十四艦と爲りたるものならん去月三十一日英國倫敦紙の電報に佛國艦隊は南方に向ひ出立したりとありしが福州より雞籠は東南の方位に當り居るゆゑ此電報も決して事實か粗略せざりしものゝ如しと又或る海軍老練家の説よ^リ福州より雞籠までは海上百英里あり十二艦の軍艦が福州を出立して雞籠に到り夫れより薪水の用意を畢り再び福州に歸り来るにハ餘程の時日を要す然るに今四晝夜足らずの間に諸事不便の雞籠に到りて此用事を果たし來りさりと云ふは少し手廻はしが早過ぐるといへり何にしても佛國艦隊が四日間の神隠^{シテ}しは實ふ不思議千萬なり何れ後報を得て委細の事を知るを得べし、さてクルベー提督は此十四艘の軍艦を以て是より何事を爲そにや
次項の佛艦パルスエバル號が二日朝上海港を拔錨し清國軍艦が吳淞までこれに附添ひ行きさりといふは兼て上海碇泊の快走船パルスエバル號が國開戦のため退立て命ぜられ立去りたるものにて清艦は附添ひし途中よ^リ亂暴をせぬやう見張りのためありしなる是迄上海碇泊の佛國軍艦は唯此一艦のみありしも之是れよ^リ上海かは佛國軍艦の跡を絶ちたるあり